

今年も寿地区・福祉の文化祭が開催されました！

毎年恒例の寿地区・福祉の文化祭が開かれました。以前は地域の方や周辺施設が参加、体育館に集まりそれぞれが発表をしたり、「コムサンバ」を皆で踊ったり、「この街に生きて」を歌ったりと、貴重な交流の場でしたが、昨今のコロナの影響もあり、昨年は寿小学校の児童のみなさん達と作品交流でつながりを持っていました。

今年は作品交流は継続しつつ、新たに寿地区に加わった「ケ・セラ」さんによる演奏会を行いました。生で聴ければ一番ではありましたが、コロナ対策もありリモートでの実施に。リモートだからこそ参加できる方もおり、貴重な時間になりました。音楽が大好きな利用者さんはたくさんいます。皆がよく知った曲を沢山演奏してください、大いに盛り上がりました。最後に「この街に生きて」を皆で合唱し、久しぶりに感じた一体感。また来年も、皆さんと”繋がりたい” そう思える時間でした！

演奏上手だね～！



この曲
知ってるよっ！



この街に生きて～♪

～この街に生きる～

知的障害者の自立生活運動

今から 30 年程前のことだろうか。身体障がいのある方の暮らしの場は、障害者の入所施設か自宅だった。当時の入所施設で暮らした方に施設での様子を聞いたことがあるが、トイレに行きたくても職員の数不足、待っている内にその場で用を足してしまい怒られたこと。お風呂も週に 2 回だけで、夏場は大変だったことなど、障害のない人が当然のように手に入れている暮らしが、そこでは叶わなかった。そんな中、身体障がいのある当事者が施設ではなく、街で暮らすために自らその暮らしを手に入れようと動きはじめた。

これが「自立生活運動」である。毎日、一人ひとりの暮らしに合わせた個別のサポートを手に入れて、自分なりの暮らしをカタチにしていく。地方では限界があるので、なかには、東京に出る方もいた。

今月初旬、国連の障害者権利条約の委員会が日本の障害者施策の取り組みを初めて審査し、「改善勧告」を出した。そこには、障がいのある人を特定の生活様式の場に施設収容しないこと、普通学校で学びたいという希望が受け入れられずに、特別支援学校に通わざるを得ないケースを問題視する内容があった。

これらの基本にあるのは、「人権」だ。勧告が強調したのは、障害の有無にかかわらず共生できる社会の実現だ。障害のない人と同じ暮らしであるか、障害のない人が望まない暮らしを、「支援」という言葉で強いていないか。私たちは、言葉にすることが苦手な知的障がいのある人の自立生活運動を支えていくことが求められていると受け止めている。

《ねくすと施設長 片桐政勝》